

# 燦々日光午睡の部屋

かんごろう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サーヴァントたちが暮らすシミュレートルーム。  
キャットの世界は今日も騒がしい。

目次

## 燦々日光午睡の部屋

カルデアに召喚されたサーヴァントの多くは、各々の自室で余暇を過ごす。

個人使用であつたり、複数人でシェアしたり、集会の場となつたり、かたちだけの就寝に利用したり、その形態は様々だ。

サーヴァントの多くは元人間、ないしはそれに近い神性や怪物が占めている。長く霊体化したままでいるより、実体化して各々の娯楽に耽ることを好むのは、別段不思議なことではない。

ただし、カルデアの部屋が有り余っているとはいえ、狭い空間自体に拒否反応を起こすサーヴァント達も一定数存在する。

生前に大神殿を保持していたオジマンディアスなどは最たる例で、通常「部屋」と呼べる空間に彼を押し込むというのは、大英雄アーラシユにもできない相談であつた。

そうしたサーヴァントたちのために、技術顧問のダヴィンチが提案したのは、シミュレータを利用した生活空間の提供である。

本来は戦闘演習に用いるものだが、再現された建材や装飾は、シミュレーション中においては現実と遜色ない。それを利用して、各々が満足いく空間を、仮想空間内に再現するのである。

このシミュレータータームの試みは好評で、今や両の手で数え切れないほどのサーヴァントたちが、このシステムを使用していた。

そんな電子の部屋の一つに、藤丸立香は今日もアクセスした。

くくく

立香が目を開けると、そこは質素な庭に面した風通しの良い縁側だつた。

ヒグラシの鳴き声が、どこか遠くから聞こえてくる。鼻孔をくすぐるのは、雨上がりの土の匂い。

晩夏の夕暮れを切り取った、タマモキヤットの世界だ。

「おお、ご主人。よくぞ来てくれた、くつろいでいくがよい」

縁側で丸くなっていたタマモキヤットが顔を上げ、ひよこりと起き上がる。

「いいよ、そのままじ」

「よいものか。お昼寝タイムは何物にも代え難い至福であるが、キヤットの本質は奉仕と給仕、つまりはメイド業なのだワン。ご主人は座して待つべし」

向日葵のような満面の笑みで言われては、立香も止める術を持たない。ここは彼女の部屋なのだから、彼女がしたいようにさせるのが一番だ。

軽やかに奥間に消えていくタマモキヤットを見送り、立香は縁側に腰掛けた。

「……」

頬を撫でる涼風。揺れる風鈴。

これほど心落ち着く場所を、立香は他に知らない。

ぼんやりと空を見上げていると、不意に、ガサリと草葉が擦れる音が聞こえた。

ゆっくり視線を下ろすと、茂みから顔を出したものと目が合う。それは、巨大な体躯の狼だった。

「いたんだ、アヴェンジャー……」

狼王はのそりと立ち上がると、無言のまま光の粒子になつて消える。シミュレータから出たのだ。

遅れて、彼の片割れである首なし騎士が、控えめに左手を挙げてから消えていった。

「たまに現れるぞ、あのワンコ。人の気配がないゆえ、居心地がよいと見える」

湯呑みと茶請けを乗せたお盆を持って、タマモキヤットが戻ってきた。

シミュレータ内でお茶を振舞われるというのも不思議な話だが、電子技能にも長けるタマモキヤットによる改良の賜物らしい。

「二応、草原とかも設定はしたんだけどな。あんまり入りたがらないから、シミュレータルーム自体気に入らないのかと思ってたよ」

「馴染みのあるものが、逆に辛いこともある。つまり、ネコに煮干を与えすぎては良くないという好例なのだな」

「わ、わからん……」

「深く考えるな、ご主人。ワタシは煮干よりもニンジンを好む」

湯呑みを受け取り、立香は控えめに口をつける。ぬるめに淹れた緑茶の苦みが、口の中いっぱい広がった。続いて茶請けのどら焼きを頬張ると、これまた粒あんの甘さが染み渡る。

「美味しいね、流石」

「うむ、ご主人が嬉しいとワタシも嬉しい。しかしここで食事をして満足感が得られるだけで、いずれ餓死する。心するように」  
「わかってるって」

「どれだけ再現性が高くても、ここにあるのはあくまでデータ。栄養はない。」

「わかってはいても、この縁側での一服は代え難い時間だと立香は思っていた。」

「今日のお勤めは済んだのか？アフターファイブなのか？」

「んー、まあ、そんなところ。訓練メニューはこなしたし、今は特異点も見つかってないしね」

「ならば、清々と羽を伸ばすがよい。どれ、耳掃除をしてやろう。キヤットの爪が火を噴くぜ」

「やめ、くすぐりたいからー！」

「ワハハハー！」

ふわふわの毛とぷにぷにの肉球が、無遠慮に立香の顔をまさぐる。立香が足をばたつかせると、タマモキヤットはさらに激しく、立香の顔を弄り出した。

「ちなみに、今日は段蔵ちゃんが来てるぞ」

「は……う？つて、わーっ！」

軒裏からいきりと生えてきた顔に、立香は飛び退るようにタマモキヤットと距離をとった。

「座った姿勢からの機敏な跳躍……マスター、今の動きはとても忍者的でございます。やはりマスターには是非、この段蔵めの教練に参

加して頂きたく」

「いきなり出てきたかと思えば、また脈絡のないことを……つていうか、キヤット！他の人がいるならそう言っというてよ！」

「ワタシの良妻ぶりを見せつけたかった。反省はしていないし、後悔もない。あるのは達成感と煮干への未練のみ」

「いや、さつきニンジンがいいって……あー、もう相変わらずキヤットはー！」

「マスター、先ほどの戯れのことならお気になさらず。ペットとじゃれ合うようでもとても愛らしく、色事の気配は露ほども」

「お？もしやキヤットは喧嘩を売られているのでは？」

シユツシユツとネコパンチを繰り返すタマモキヤットを尻目に、庭に降り立った段蔵は、いそいそと立香の隣に腰掛ける。

「泥棒猫……キヤットを差し置いて猫を被るか……」

「まあまあ……。それにしても、段蔵もキヤットのルームに来るんだね。アヴェンジャーがいるよりかは馴染んでるけど」

「ええ、たまさかに。この身は絡繰なれど、風雅は心得ていると自負しております。キヤット殿のセンスは、実に好ましい」

「今更媚びてももう遅い！茶の湯と菓子を貪り身体を伸ばし、ゆるりとくつろいでいくがよい！」

ガミガミした口調と、そつと差し出される湯呑み。視覚と聴覚の情報に噛み合わず、立香はまた混乱する。

段蔵は、至って自然にまったりしていた。

「あらあら？今日はとっても賑やかね」

ついていけない自分が未熟なのかと腕を組む立香。その耳が、これまた新たな声を拾う。

鈴の音のような、魅惑の美声。聞き違えようがなかった。

「むむむ。その声はマリィ。いやマリィアンヌ！」

「まとめないでください！」

「御機嫌よう、キヤットさん。ヴィヴ・ラ・フランス！」

現れたのはマリィとジャンヌ。共にフランス所縁で、姉妹のように仲の良い二人だ。

そして、マリーとタマモキヤットは第二特異点からの付き合いである。こちらにも気心の知れた仲らしいが、大体いつも会話が噛み合っていない。

「千客万来なのだ。これはお茶不足の危機。お茶がなければミルクを飲めばいいとは言うが、このままでは一揆も有り得る」

「それなら、今日は私に振舞わせてくださいな。よいしょ」

どすん、と巨大なガラスの馬車が質素な庭に鎮座する。マリーの宝具の一部であり、やたらと容量の大きい倉庫である。

マリーはその中から、白と金のティーカップとポット、何やら高価そうな紅茶の葉、そしてぐったりとしたエミヤを取り出した。

「……近頃見ないと思ったら、こんなところに……」

無惨な姿のカルデア台所番の姿に、立香は一人黙祷を捧げる。それを見たジャンヌも、目を伏せて十字を切っていた。

「彼の淹れる紅茶は絶品なの！キヤットのお茶に負けないくらいなんだから」

「なんと。そうまで言われると、この段蔵も興味を抱きます」

絡繰とは思えない食への執着である。

自分が褒められているわけでもないのに、マリーは嬉しそうに、「ええ、ええ！」と繰り返していた。

そしてこれは、シミュレータの外でやるべきではないか。立香はそう思ったが、面倒くさそうなので進言を止めた。

「……收拾つかなくなってきたし、そろそろ帰ろっかな……」

「ごーしゅーじーんー。敵前逃亡は切腹である。キヤットとマリーの茶道のぶつかり合い、裁定を下すはご主人の役目。質より量の裁決を行うルーラーは当てにならぬ」

「ちよつと、今私を馬鹿にする必要ありません!?!」

「いっぱい食べるジャンヌは魅力的よ。ハムスターを飼ってるみたい」

「マリーまで！そんなもの、飼ったことないでしょうに!」

「マスター、マスター。段蔵は牛が吞めます!」

「張り合い方がおかしいんだよなあ……」



頭を抱える立香の姿に、タマモキヤットが一際大きく、ワハハと笑った。

飛び交う声、止まない喧騒。

土の匂いも、ヒグラシの声も、遠くなる。

タマモキヤットの周りはいつもそうだ。

賑やかで、騒がしくて、笑顔が絶えない。

こんな静かで質素な世界を作りながら、彼女はそれだけで済まさない。

だから、立香はここが好きなのだ。

この懐かしい情景が。

いつかの夏、花火のような輝きが。

いつだって、ここにあるから。